

成立するわけがない。信衆が不退転地を開く道理がない。願生心の根源としての欲生心こそを、廻向心と云われた親鸞の深意を思わねばならないのである。

天台の神通義

本学専任講師 福島光哉

天台智顛（五三八―五九七）の法華学上における神通の解釈を求めるのがこの課題であるが、とくに彼の法華経の原理に基づく実相論や法界観と諸仏菩薩の神通示現の関係が、いかに統合せられているかの点について考察を試みようと思う。

中国六朝時代の法華思想として、一つには竺道生、道融、法雲などのように主として法華経の開三顯一など原理的な理論研究に基づくものがあつたが、いま一つには法華経を読誦・書写し、或いは観音信仰や普賢信仰として法華経を実践することを主とするものがあつた。中でも観音信仰は僧俗を問わず、南北両地にかなり早くから行なわれていたことは各種の僧伝や法華伝類によつて知られる。観音信仰は普門品によると、衆生が各種の災害や疾病に陥つたときに、一心に観音菩薩の名を称えるなど身口意の三業をもつて供養すれば、観音菩薩の神通力によつて衆生の七難を消滅し、また観音は三十三身をもつて普門示現するという。当時の人々は、経説の如く現実の苦悩災厄を逃れるために、奇蹟的、神秘的な観音菩薩の神通にすがつて安らぎを得ようとする素朴な信仰を抱いていた。また普賢勸発品や観普賢經によると、一心に法華経の文句を専念すると普賢菩薩が色身となつて六牙の白象に乗つて行者の前に現われ、金剛の杵をもつて行者の眼を擬すれば障

道の罪は消え、眼根をはじめ六根清浄を得て釈迦仏やその分身仏、多宝仏などを現見できるといい、このとき普賢菩薩は衆生の前に普現色身三昧によって一切衆生所喜見身となって現前するので、この普賢の応同を期待するという信仰も、一部では法華經の実践として行なわれていたのである。

智顛もまた幼少のときから法華經に親しみ、七歳の時に普門品を誦じた頃より、觀音菩薩に対する信仰には強い関心を抱いていた。とくに大蘇山・瓦官寺時代には請觀音懺法などを組織しており、やがてこれらを四種三昧中に取り入れ、臨終に際して觀音の來迎を期待したというような伝記によっても、そのことは充分窺い得るところである。けれども智顛は、觀音信仰などを安易に觀音菩薩の神通示現による応同を期待して、奇蹟的な救済にあずかるというような信仰に満足せず、このような仏菩薩の応同を感じる。當時一般に大乘仏教における神通示現は、衆生化他のためになされる仏菩薩の行為であり、それが神通と名づけられる所以は、智慧が無礙自在であればその智慧力によって身口意の三輪による不思議な示現となり、それは人智をもってしては測り知れないものだからである。そしてとくに身通は、衆生の常情を動揺せしめて仏道を渴仰せしめるのがその目的とされていた。智顛も以上の点については承認していたようである。しかし智顛は、各種の大乗經典に説かれる大小さまざまな神通のうち、それが仏菩薩によって衆生教化の手段として故意に施された神通示現であれば、方便神通に過ぎないとし、従来諸禪を修することによって得られる

と云われて来た天眼・天耳などのいわゆる六神通も、多くの場合この方便神通を表わすものであったと考えられている。そしてそれに対して真実円教の神通は法華經に説かれている序品の現相や三変土田や觀音・普賢などの神通であるとしたのである。そこで彼は法華經の諸神通を弁証するのに六根清浄の原理に立つてその根拠を説明している。それによると、まず眼耳鼻舌身意の六根の清浄を得れば、天眼や天耳などの六神通はすべてその中に含まれ、さらに鼻・舌二根の神通力を備えるのであるから六神通よりも広い神通であることを主張し、六根は悉く智慧によって有機的に統一されているので、智慧を備えれば自ら六根すべてが同時に神通としての力用をもつのだという。そして六根清浄を得るためには、諸禪によって得るのでなく、直ちに「実相常住の理」を縁じて修習すべきことを明かし、これは「中道の真であり、真には自ら通あり」と云い、だからこれを無記化化禅というのだと説明している。ここに無記化化禅というのは菩薩地持論卷五に説かれている九種大禅のうち一切禅に属するものであるが、智顛はこれについて「無記」とは作意せざる意味であって、意識的に方便を講ずることなく任運無作の行為ということであり、「化」とは化復能化といって一時に無限に多くの化身を現わし得る神力を云うのだと解釈している。このことを彼はまた「如来を見るに諸の神変と二なく異なし。如来が神变となり神变が如来となる。無記化化にして化復た化となり、窮尽すべからず。皆不可思議なり。皆是れ実相にして仏事となる。」という。このように円教の神通は任運無作の神通であって、しかもそれらが実相常住のあらわれであり

そのまま仏事であるというのである。

もともと六根清浄については法師功德品に、法華経を誦誦・書写することによって父母所生の眼根が清浄となり、三千世界を見るなど多くの功德を得ると説かれ、他の五根についても同様に清浄となってそれぞれ多くの功德を得ることが明かにされており、また観普賢経には、父母所生の清浄の常眼によって五欲を断ぜずしてよく諸の障外の事を見ることができると説かれている。智顛はとくにこの「常眼」に注目し、これは肉眼と仏眼とが不二であることを説くものとし、史掘摩羅経によってつぎの如く把握している。すなわち史掘摩羅によると

所謂彼眼根 於諸如来常 決定分明見 具足無減修 ……

(史掘摩羅経卷三、大正2・531C)

と説かれている。智顛はこの経文について「彼」とは仏法界を除く九界の衆生であって、彼らは自らの眼根を無常にして真に非ずと謂うけれども、その眼根は如来においては常住であり、九法界の眼根は即仏法界となる。そしてその眼根は実相の理を照らし、法界の事を分明に見るのであり、「無減修」とは事禅に依らず実相の理を縁じて修することであると解釈する。したがって、本来我々の肉眼は実相常住の理にかなっている。即ち仏から我々の眼根を見れば仏眼と同じ原理に立っている。ただ現実には我々の肉眼に限界があつて実相さながらに見通すことができないだけであるから、実相を見通す智慧が具備されればそのまま仏眼であるといい、これを眼根清浄というのであり、他の五根についても同じであると解釈するのである。云いかえれば、神通力の根柢となる

六根のはたらきが、智顛のいう法華経の現実的な実相そのものを開顯するとき、ただちに諸の神通となつて示現するというのである。

以上の如く智顛の主張する神通は、ただ無軌道な奇蹟的な神通をいうのでなく、本来あるがままの実相の示現を離れていないのであって、その原理に適ったありかたとして特に神通の示現をつぎの如く説明している。すなわち、正報に応同するときは即ち十法界の像を示し、依報に応同するときは十法界所依の場処に同ずるといふ。たとえば地獄に応同するとは、地獄の悪業を觀する慈悲が無記化化禅という任運無作にして自在なるはたらきによって地獄の姿となり、畜生法界には猿猴鹿馬となつて畜生とそれぞれ同じはたらきを示現する。したがって人間の法界に対しては人間の姿、具体的には託胎・納妃・生子・厭世出家という姿となつて菩薩の最後身として示現する。これは人間界の善業を觀する慈悲が、実相の原理に基づいて無記化化禅によって人間の身となることである。

とすれば我々にとつて人間の世界に積尊が現われたのは、如来神通の最高の示現であり、仏弟子たち声聞の法界には積尊が老比丘の像となつて現われ、布薩を共にしたのは声聞界にとつて如来の最高の神通示現である。そしてこのように十法界に応同して示現することは、そのまま実相常住の顯現であることになる。

以上の如く、智顛は神通を素朴に超現実的な不合理な示現とする通説に反対し、どこまでも実相原理に基づく示現であると解釈した。このことから彼の神通に対する期待は、決して他者的な仏

菩薩の応同に見出すものでなく、自ら六根清浄を得て神通力を自身の上に具現しようとする点にあったことがわかる。そしてその為、観音や普賢などの諸菩薩を実相原理の象徴であるとして把握しなおしたのであり、とくに四種三昧中の法華三昧や請観音經による非行非坐三昧には、その象徴の意味すなわち実相を探究することに主眼がおかれているのである。したがって専門品や勸発品において神通が説かれた目的は、智顛においては法華經の実相原理を顕彰するところにあつたと考えねばならない。

かくして智顛は、神秘的超現實的な仏菩薩の神通応同を、現実主義的な実相原理、即ち円融三諦や十界互具などの原則のもとに統合し、ここに新しい法華經學が成立することになつたのである。

人倫国家の悲劇性について

— イエナ前期ヘーゲルの政治思想 —

本学助教 訓 覇 嘩 雄

右のタイトルで、一八〇二年から三年にかけての『自然法論』と、手記『人倫の体系』におけるヘーゲルの思想をとりあげるが、初めにこの時期のかれのもった課題を概観しておきたい。

ヘーゲルの思考の型は、「分裂を克服して統一へ」であるが、いま分裂とは、小国家に分裂した祖国ドイツ、そこにおいて全体像を喪失し、個人的目的のみに関っている市民生活、普遍的道德法と個別的特殊に分裂している自己内心の生である。

ヘーゲルは、ベルンからフランクフルトの家庭教師時代、この分裂の起源をユダヤの「分離の思想」に見、これと対決するイエスの「愛による和解」の宗教にその解決を見いだそうとした。しかし生命の統一感情としての愛は、その圏外の問題（所有、権利、国家社会）が未済であるとき、また疎外の運命にひきわたされるものであつた。

そこでヘーゲルは、この愛を損うものを自己の運命として引受け、『ドイツ憲法論』において、現実のドイツ国家を分析し、来るべきドイツ民族の国家には、その国家としての単一性の面から権力が、個別国民の多数性の面から自由が要求され、この単一性と多数性の統合されるところに、真の意味で分裂を癒す国家が成